

# コース 11 はるなさん ふたっだけ 榛名山・二ツ岳

リーダー CL K/T SL M/T  
 実施日 平成22年5月30日(日) 天候 霧  
 参加者 36(男性10 女性26)  
 グレード B  
 コースポイント

ポイント	到着時間	出発時間	備考
新津駅西口		5:25	高速道、長岡前後で小雨、先行が心配。
渋川伊香保IC		8:17	関越トンネルを抜け霧のかかる空。
伊香保森林公園	8:50	9:05	水沢山登山口の向いの登山口より入る。
オンマ谷分岐	9:38	9:43	ここまで、山ツツジの満開の中を通る。
雌岳	10:22	10:30	両方とも眺望なし、見えるべき山が見えたつもりで、ムラサキヤシオが終りかかっていたが見られた。
雄岳	11:13	11:30	
オンマ谷入口P	12:00	12:40	風穴の広場で昼食。
二ツ岳分岐	13:15	13:23	オンマ谷は霧が緑色して、幽玄の世界。
森林公園	14:00	14:25	ツツジヶ峰を登り時より、更に下がったところまで、再び山ツツジのトンネル。
水沢観音	14:45	15:10	外国人観光客で賑う。
渋川伊香保IC		15:40	
新津駅西口	18:40		県境のトンネル越えたら晴れが、恨めしい。

## 山行等概要(幹事のコメント)

- 人数が、マイクロ1台では余り、2台では足りない。中型バスは空いていないとのことで、小型バスとジャンボタクシーの併用とした。多少高くなったが希望者全員に応えることができた。
- この山行の見所は3つ、①雌岳、雄岳からの眺望(両神、浅間、草津白根、谷川連峰、武尊、日光白根から皇海) ②山ツツジやヤシオツツジ ③火山の岩山や爆裂火口と新緑
- ①はゼロ。②はおみごと。③は霧で正に幽玄の世界で、それなりに趣があった。



雄岳 1班



つつじが丘 2班



雌岳 5班

## 「榛名山・ニツ岳の旅」

(1400) H/T

今日の新潟は久々に晴れそうだ。群馬の天気を気にしながら、バスと大型タクシーの二台で、定刻に新津を出発した。魚沼、湯沢と進むにつれて空が暗くなり、県境の長いトンネルを抜けたら雨だった。霧が出て速度規制も出されて予定より少し遅れて登山口の伊香保森林公園に到着した。

雨が気になるが、私は雨が上がる事を期待して、雨具を着けずに傘を持ち出発。

森の中を進むと、新潟の山とは少し様子が違い、下草が少ない。新潟の山はいわゆる藪だが、こちらは草の種類も少なく背丈も低く疎らだ。リーダーは熊注意の看板はあるが、熊の餌になるものが少ない山で、熊はあまり出ないと言っておられた。驚くことに山つつじが大きく伸びて、たおやかに枝を張り見事な花を咲かせている。つつじは新潟の山にもあるが、雪が積もるせいか、背が低く細い。このような見事な枝ぶりのつつじは初めて見た。さすがにつつじが峰と名付けた所だと思った。



### 雌岳 3班

緩やかな山道を進んでオンマ谷分岐に着く。雨を気にしながら少し休憩してニツ岳の登りになる。山は岩山で途中、屏風岩と名づけられた大岩が有り、まるで山水画の世界を彷彿させる。雌岳方面の分岐から雌岳へと進むと勾配がきつい木の階段になる。濡れた階段を注意しながらかなり登る。階段が終わるとまた急な岩道で、大岩を過ぎるとやがて雌岳の頂上に着いた。山頂は狭いので、各班ごとに分かれて記念写真を撮る。遠くに目を移すが、霧が深く何も見えず残念だ。リーダーの説明を聞き眺望を想像して、次の雄岳に向けて来た道に戻る。分岐点から少し進んで雄岳への登りだ。所々にまるで立体的なジグソーパズルを組み立てたような岩があり実に面白い。何万年も掛けて自然が造り出した造形だ。霧の中を進むとテレビアンテナの施設があった。直ぐその上が雄岳の山頂で、ここも狭く、班毎に写真を撮り、リーダーの説明を聞きながら、其の方を眺める。浅間山、白根山、谷川岳が見えたつもりで下山に移る。

40分程で昼食予定のオンマ谷入口駐車場に到着した。少し早めだが、小雨を気にしながらも林の中で愉しく昼食を取る。林の中は霧が掛かり幻想的な雰囲気だ。

午後は予定より少し早く出発した。歩き出してすぐに風穴広場がある。気温が高いときは冷気が感じら



### 雄岳 4班

れるのだろうが、今日は冷気の噴出しは感じない。この辺は他の場所と比べると植生が豊かだ。しかし、谷にもかかわらず岩山なので水が岩の隙間から地中に沁み込むからか、水溜りや泥濘が全くなく、足元が汚れない。張られたロープ脇にエンレイ草の小群落があった。花の色が新潟のものとは違い薄いピンク色で、中には白に近いものもある。更に進むと看板があり、昔の爆裂噴火口跡だったとか、鎌倉時代に山頂に相馬何某の遠見台があり、崖下に馬を止めていたと御馬谷の謂れが書いてあった。オンマ谷からひと登りするとニツ岳との分岐に出た。朝と同じ場所で休憩を取る。

朝は遅れての出発だったが、この時点では、逆に一時間程早く着いた、奇妙だなどと、リーダーが冗談っぽく話しておられた。

一服して、つつじが峰に戻り、満開のつつじの花をバックに最後の記念写真を撮って、駐車場へと向かった。雨も上がり、私はとうとう雨具を着ることもなく、楽しいハイキングであった。帰りの車の中では、心地良くなり、コックリ、コックリしていた。